



No.338  
2017年9月20日

発行 真宗大谷派 高山教務所  
発行者 出雲路 善公  
〒506-0857 高山市鉄砲町6番地  
☎(0577)32-0776  
\*毎月20日発行 50,000部  
三市一郡無料配布  
印刷 山都印刷株式会社

# 念じられ 照らされて

## 「迷いに還る」

瓜生 崇



〔略歴〕  
一九七四年東京生まれ。真宗大谷派支照寺住職。日本脱カルト協会理事。電子書籍による仏教書出版「響流書房」代表。

縁あって「カルト」と言われる宗教の脱会支援を十年來続けています。この活動をしていると、特に伝統仏教教団の人に顕著なのですが、「カルトなんてみんな嘘っぱちの教義で、マインドコントロールされて入るんでしょ」と見下す冷ややかな視線を感じることも少なくありません。

以前にある宗派の僧侶養成研修の講義をした時、受講生から「何を言ったところでカルトはどうせ金儲けのためにやってるんでしょ」と言われたことがあり、「そんな単純な問題じゃないんだよ」と心のなかで叫んでいました。「そりゃ騙されて

入った一面もある。でも、彼らも私たちも同じように人生の真実を求めて歩み、たまたま別のところにいる人たちなんだ」と。

その学生は私に言うのです。「アレフをやめたあと、僕はどこで真実を求めたら良いのでしょうか」と。

最近特に頻繁に受けるのが、オウム真理教の後継団体である「アレフ」に関わる相談です。脱会相談に来た学生に、その学習テキストを見せてもらったことがあります。地下鉄サリン事件を起こした教団のテキストです。どんな虚偽に満ちたものかと思うでしょう。しかし意外なことにその内容の多くは、「四聖諦」や「八正道」といった、仏教で普通に学ぶことが実に丁寧に書かれていたりますのです。そして、

私たちは生きる限り孤独と空しさから逃れることができません。だから真面目な人ほど人生に意味を求め、自分の生きる証を探そうとします。カルトはまさにそこに答えを与えるのです。カルトに入っている人は「迷っている」のではありません。むしろ誰よりも「正しい」を恐れたが故に「真実」を求め、「正しさ」を抱きしめて生きているのです。私はカルトからの脱会とは「正しさ」への依存

から離れ、「迷い」に立つことだと思えます。そして浄土真宗の救いの要も、まさにそこにあると思うのです。

目覚めさせるのは、曠劫より迷い続ける私を根底から支え続ける願いであり、それ故に私は絶望せず安心して迷って生きていけるのです。そして求めてやまなかった「正しさ」と「救い」から、ようやく解放されるのです。

私もかつて「この迷いを離れて真実に目覚めたい」と思い浄土真宗に救いを求めましたが、聴いたら分かったつもりにも惚れ、聴けずに泣いても泣いた自分に自惚れ。真剣に求めれば求めた自分を頼り、かと言ってそれを手放そうとすれば不安になり。それでも「理解」と「信心」にしがみつ

地下鉄サリン事件から二十二年、あのときオウムの信者から「風景でしかなかった」と言われた伝統仏教の寺は、ますますその存在意義を自問自答しているように見えます。寺院活性化、念仏者の生き方、信心と社会、元氣なお寺：頻繁に飛び交うこれらの言葉の裏には、寺は社会に必要なのか、形骸化した伝統仏教が本当に人を救えるのかという迷いが、かえって教団や僧侶の側に深く抱かれて示しているように思えます。

南無阿弥陀仏とは、正しさを求めて正しさに迷い、「自力の迷心」から一歩も出られない衆生を呼ぶ声です。その呼び声を聞くという事は、迷わない身になることではなく、迷いの衆生とは私であつたと頷くことです。

しかし寺は、私を迷いの身に還らせてくれる言葉に出会う場です。その言葉を「南無阿弥陀仏」といいます。たったひとり人間が寺という場を通じてこの言葉に出遇ったら、もう寺の役目はそれで果たし終えたと言えるのではないのでしょうか。

「二河白道の譬え」で、真実の世界へと歩む白道すら「自力小善の路」だとしました。私が出遇う「真実」とは、「私に真実はない」という事実なのです。如来の呼ぶ声を聞き、如来の願いに生かされてすら、私は迷うばかりの私です。

「ひとり人間」とは、他でもないこの私のこと

### おしなま くわんざら



**問** 「釋(釋尼)〇〇〇〇という法名は、自分で決めて自分で名のつてええんかな?

**答** 「釋(釋尼)」の字と漢字二文字からなる「法名」とは、南無阿弥陀仏の教えに生きる仏弟子としての名のりをいうものです。「名のり」ということは、自分で法名を決めて自分で名のりなのだ、というように思えますが、そうではありません。

自分で自分の名を改めるということはあっても、最初の名というのは、どれも「先達」によって名づけられたものではないでしょうか。宗祖親鸞聖人は、35歳で越後に流罪となつたとき、「僧にあらざる俗にあらざる。このゆえに「禿」の字をもって姓とす」と、自ら念仏者として「愚禿釋親鸞」の名のりをあ

げられました。しかし、そのように名を改める前のお名前が、師によって名づけられたものだったことは間違いありません。

また、今、私たちが日常で名のっている名前(俗名)は、自分で決めて自分で名のりつたものではなく、両親が願いをこめて「名づけ」てくれたもののはずです。つまり、先達による「名づけ」によって名のるべき名をいただいたということ。ですから名をつける、すなわち「命名」ということを通さなければ、法名を名のりすることはできないといえます。

しかし、生きていく中で、自分の中にさまざまな課題や思い、願いを抱くようになることもあるでしょう。その思いを漢字に込めて、新たに名のる名(法名)に表したいと思われた方は、ご自分の命名(帰敬式)について、お手次のお寺にご相談されてはいかがでしょうか。

### 飛驒御坊 御遠忌通信 ⑦

## 御遠忌ブックフェア開催!

2019年5月10~12日まで高山別院において宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌法要が勤まります。それに伴い、親鸞聖人について一人でも多くの方に知っていただきたく、本年秋に『御遠忌ブックフェア』を開催いたします!

開催書店はブックスアイオー(岡本町)、田近書店(三福寺町)です。

普段はなかなか手に入らない東本願寺出版の書籍をはじめ、親鸞聖人、浄土真宗に関する書籍を幅広くたくさん置かせていただきますので、手に取っていただければと思います。

是非一度書店へ足を運んでみてください。10月から11月上旬まで開催予定です。



☎テレホン法話(0577)34(23)13 ○9月21日~30日:日野光洋氏「桂林教会」 ○10月1日~10日:渡邊侑希氏「了因寺」 ○10月11日~20日:龍池玲奈主事「教務所」

宗教トラブル相談窓口(0577)321-0763



私を照らす

ひかりの言葉 ②

酒井 義一

締め切りに追われ続けて

2013年12月に始まったこの連載も今回が最終回となりました。約4年もの間、つたない文章にお付き合いをいただき、誠に有難うございました。

文章を書くということとはとても大切なことですが、とても大変なことでもあります。実は、ほぼ毎回締め切りに追われ続けていました。そのことからやっとなんか解放されるかと思つと、正直ほつとしています。

書くという形で聞く

この連載を執筆する中で感じていたことがあります。それは、文章を書くという形を取りながら、実は自分が何を聞いてきたのかを明らかにするということでした。自分が何に出会い、何を聞いてきたのかを、思い起こす。そして聞いたことによつて、何を感じ何を学んだのかを、自分の言葉で表現するというのが、文章を書くということなのではないでしょうか。書くという形を取りながらも、その基本は聞くということにあつたようです。

オリジナルを目指す

文章を書くうえで大切にしているべきことを諸先輩から教えていただきました。そのことを今、まとめてみたいと思います。

語りかけるように

難解な表現ではなく、語りかけるようにして書く。

私が響いたことを

受け売りではなく、私を感じたこと、響いたことを書く。

教えに道を尋ねて

教えの言葉に、私の歩むべき道を探る姿勢を忘れずに。

\*字数を守る

書く時は字数を、語る時は時間を守る。これ基本。

\*オリジナルを目指す

自分なりの表現方法を模索し、あらゆる工夫をこらす。もちろん出来ている自信はありませんが、今回の連載であらためてはつきりしてきた、大切にしていくべきことです。

終点は新たな出発点

連載は今回で終了しますが、「書く」「伝える」「表現する」ということに終わりはありません。生きるということは、自分自身を表現していくということ、自分の言葉を持つということではないでしょうか。そのような歩みには終わりはないのでしょうか。人間の歩みには節目の時は訪れますが、終点はありません。終点だと思つたところが、常に新たな出発点となるのです。自分の言葉を獲得し、自分を表現していくという歩みには、終わりがありません。

課題を歩む中の再会を

「弘」は、ひろしという、ひろまるという。  
(唯信鈔文意「真宗聖典550頁」)

教えは弘めるものではなく、弘まるものだと親鸞は言います。

すまるとして身に備わっている煩悩を大きな仏縁として、その人に教えの世界が弘まってくつていくのでしょうか。しかし、だからといってこちらは何もしなくていいということではありません。伝える努力と工夫を怠つてはならないでしょう。

僧侶の聞く力・伝える力が時代社会から厳しく問われています。教えはかならず伝わるという確信を内にいだきながら、それぞれの聞く力・伝える力を強く護持し、養育していかなければなりません。

耳を澄ませば、時代社会から、そして仏法から、私への問いかけや呼びかけが届けられているのです。絶えることなく。それらの声にきちんと応えていくような歩みをしていきたいものです。

それぞれが自らの課題を歩む中でまたお会いできることを、心よ念じています。

長い間、有難うございました。(おわり)



今回は藤場芳子さんの「女と男のナムアミダブツ」です。

子ども作品展「作品募集」

10月21日(土)から11月3日(金)まで、高山別院本堂にて「子ども作品展」を開催します。是非ご応募ください。

書道の部

10月6日(金)必着

〈課題〉

- 小学一年以下 「はす」
小学二年 「ともしび」
小学三年 「寺のにわ」
小学四年 「信ずる心」
小学五年 「念仏の道」
小学六年 「如来大悲」
中学生 「御坊報恩講」

絵画の部

小学生 楷書・半紙
中学生 楷書または行書 半切1/4紙

〈課題〉

- 小・中学生 「家族」
画材、用紙の大きさ自由
※表彰式は11月3日(金)「高山別院報恩講」中に行います。
※お問合わせは高山教務所まで (0577-3210776)

いご壇案内

詳細は会所のご寺院にお尋ねください。

【9月】

- 20日(水) 本教寺「西町」
23日(土) 恵林寺「清見町」
24日(日) 浄念寺「莊川町」
【10月】
1日(日) 随縁寺「上切町」
8日(日) 寶圓寺「漆垣内町」
13日(金) 圓龍寺「大門町」
14日(土) 還來寺「丹生川町」

高山別院報恩講

帰敬式受式者募集

帰敬式とは... 「帰敬式」は、一般に「おかみそり」という名前で親しまれてきた儀式です。

おかみそりを受けて法名をいただくのは、亡くなってからと思われがちですが、本来、帰敬式は、お釈迦さまの弟子(仏弟子)になるという儀式なのです。生きています今、私の生き方、あり方を学び、仏・法・僧の三宝に帰依し、人として生まれたことの意義を明らかにしようという式が帰敬式です。帰敬式は出発の式ですので、思い立ったそのときに受式しましょう。

日時 11月3日(金) 午前9時から

会場 高山別院本堂

申込 10月13日(金)までに、お手続きのお寺へお礼金(13,000円・20歳以下6,000円)を添えてお申し込みください。

帰敬式事前研修会

前載の帰敬式の事前研修会を行います。この研修会は公開でも、これから受けようと思われている方でも、どなたでもご参加いただけます。是非お越しください。

日時 10月20日(金) 午後1時半から

講師 三島 多聞氏 (高山一組真蓮寺住職)
会場 高山別院御坊会館

ご坊文化講座(第3回)

日時 10月19日(木) 午後1時半から

講師 朝戸 秀臣氏 (本願寺派神通寺前住職)
講題 「神通寺の歴史」
会場 高山別院庫裡ホール
会費 600円

秋の彼岸会・永代経法要

亡き方をご縁として仏法に出会う大切な仏事です。ぜひお参りください。

9月20日(水)~26日(火) 午後1時から勤行・法話

- 20日(水) 四衢 亮氏(不遠寺住職)
21日(木) 小原 正憲氏(専念寺住職)
22日(金) 窪田 哲氏(圓徳寺前住職)
23日(土) 藤守 頼章氏(憶念寺住職)
24日(日) 竹田 雅文氏(東等寺住職)
25日(月) 三島 多聞氏(真蓮寺住職)
26日(火) 三本 昌之氏(蓮徳寺住職)